

## 肖像

冬としてはあたたかい  
さんさんと日の降るある日  
焼け跡の石垣の側に一人の老婆が立つてゐた  
顔はきざみ煙草みたいな皺がたくさん  
着物はよれて灰色だつた  
そして左の目が  
やつぱり灰色にどんよりしてゐた  
通りすがりの僕の方を  
生きてゐる方の漆黒の目が

きびしく意志をひそませて見た  
通りすぎるのを  
秒瞬も失ふまいと  
純粹の敵意でもって!  
通りすぎるのを見定めてゐる老婆  
ふつと僕は耳にした  
声でない声  
----- ここは私の屋敷なんだ  
ここは ここは 私の家  
僕は見た  
電信柱に変圧器  
空には吐息の白い雲